【論　文】

連携による景

浅野則子

【要　旨】

万葉集には内舎人として久仁京にいる家持と旧都に残る弟書持との贈答歌が収録されている。家持と書持との関係、さらに二人がいる場所があまりに明らかなために二人の「心情」表現としてのみ解釈されているが、平城京において歌の文化圏を持つ家持とその世界にいたと思われる書持にとって歌に表現する意味を二人に歌われる「景」から考えていきたい。

【キーワード】

歌の文化圏・旧都と新都・景物・季節

はじめに

家持と弟書持との贈答歌が巻十七に収録されている。内舎人として久仁京にいる家持に旧都に残る弟書持が贈り、家持が答えたもので初夏の景物を中心に歌われている。歌は次のようなものである。

橘は常花にもがほととぎす住むと来鳴かば聞かぬ日なけむ
玉に貫く楝を家に植ゑたらば山霍公鳥離れず来むかも

右は、四月二日に大伴宿祢書持の、奈良の宅より兄家持に贈りしものなり。

橙橘初めて咲き、霍鳥翻り嚶く。この時候に対ひて、詎志を暢べざらめや。因りて三首の短歌を作り、以て鬱結の緒を散らさまくのみ

あしひきの山辺にをればほととぎず木の間立ち潜き鳴かぬ日はなし
ほととぎす何の心ぞ橘の玉貫く月し来鳴き響むる
ほととぎす楝の枝に行きてゐば花は散らむな玉と見るまで

右は、四月三日に内舎人大伴宿祢家持の、久迩京より弟書持に報へ送りしものなり。

十七―三九〇九～一三

この贈答歌については、従来は二人の心の交流と解釈されることが多いが、[註①] 鈴木武晴氏は表現に大嬢の寓意[註②]をみるとされる。どちらの解釈にしてもそこには、兄家持、弟書持という実際の関係が強く意識されている。旧都と久仁京との間を行き来することは容易に行われることではなかったが、果たしてそのように心情と結びつけて考えるだけでよいものであろうか。越中へ赴任した家持にとって、都に残した

人々との贈答歌として残すことは都の文化圏とのつながりを意味することであることは、既に論じているが、そのように離れた場所から歌を交わすことは、同じ文化圏であることを意識しあうことなのではないだろうか。家持が創り上げた歌の文化圏という点から、弟書持との歌のありかたを考えていきたい。

一

これらの贈答歌が交わされた時期を確認しておきたい。天平十三年（七四一）四月。藤原広嗣の反乱以降、平城には戻らない聖武は恭仁京に至り、三月には五位以上に平城居住を禁ずという命[註③]を出している。家持は内舎人という立場であり、聖武天皇と行動を共にしている。書持の歌から見ていきたい。

書持はまず、橘が常に咲く花であってほしいと歌うが、それは、花に対する興味ではなく、そこに来る「霍公鳥」がいつもいることを願うものである。橘は卯の花とともに「霍公鳥」との取り合わせとして歌われるものであるが、この歌では「聞かぬ日なけむ」と歌うことから「霍公鳥」はまだ書持のもとには来ていないことが明らかであろう。

「霍公鳥」とのとりあわせで、いつも「霍公鳥」がいるようにするためには次のように歌われる。

① 橘の林を植ゑむ霍公鳥常に冬まで住みわたるがね　十一一九五八

橘の木の数が多ければそこにとどまるという発想である。「霍公鳥」と橘がともに夏の景物という共通理解のもと、夏の花である橘の数が多ければ、「霍公鳥」がとどまるべき夏が長く続くというのである。「霍公鳥」を夏という季節の鳥として意識し、その木が多ければ夏から冬まで「霍公鳥」が住み続けるという①の歌に対して書持の歌は橘の花が季節を超えてしまうことで「霍公鳥」の常住を願うことになっている。季節とともに歌われることが多い「花」に「常」とつく例は、万葉集中この歌のみである。季節の訪れを意識させるべき「霍公鳥」として夏という季節とともに歌われる「霍公鳥」と橘であるとしたならば、「常花」と歌うことに書持は意味をもたせているのではないだろうか。

「常」ということに対して、新日本古典文学大系では「常葉の木であっても花の咲く季節は初夏と決まっていて「常花」ではない[註④]」として、「もし、そのような「常花」であったなら、花を訪れて鳴くホトトギスの声が一年中聞けるのにと詠う」と「常葉」と結びつけているように 橘は決して「常」ということばと無関係な木ではない。しかしながら、歌の共通理解において、橘に「常」という意味を見いだすのはその葉と実においてであろう。

② 橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の木　六一一〇〇九

③ 常世物この橘のいや照りにわご大君は今も見るごと　十八一四〇六三

④ 大君は常磐にまさむ橘の殿の橘ひた照りにして　十八一四〇六四

②から④の歌はすべて橘諸兄に関係する歌である。②は「冬の十一月に、左大弁葛城王等、姓橘氏を賜る時の御製歌」という題詞を持つ天平八年（七三六）のものである。題詞から考えると作歌の時期から

聖武天皇の作であるが、左註によると元正上皇とされるが、天皇、もしくは上皇から「橘」という姓が常緑樹であることにより、橘氏の繁栄を予祝しているという一族の名誉ある歌であることに違いはない。③・④は天平二十年（七四八）越中守であった家持が橘諸兄から使わされた田辺福麻呂によって伝誦された橘家での肆宴歌に追和したものである。伝誦された歌では、橘家の繁栄と上皇の威厳が歌われ、その関係の緊密さが示されているが、家持はそれらの歌を意識しつつ、「大君」の長久不変さを歌う時、その上皇の長久不変を際立たせるための「橘」を強調しているのである。

大伴家の中心的人物である家持にとって橘諸兄は特別な存在であることはいうまでもない。弟書持もかつて家持とともに、天平十年（七三八）に諸兄の息子奈良麻呂の宴に招かれて「黄葉」をテーマとした歌を作っている。[註5] 書持もまた、家持と同じ意識で橘一族をとらえていたことは確かであろう。[註6] そのように考える時、「常」とつく橘は橘一族にのみ歌われるべき歌の言葉として二人は意識していたとみてよいのではないだろうか。そのように考えた時、「常花」とは二人にとってありえない花なのである。書持は「常花もがも」と願望しているのは、それがあり得ない景であることを歌っているということになろう。「常花」という表現によりそうではない景を強調したといえよう。家持が好む「霍公鳥」はまだここにはいないと書持はまず、歌で家持に告げたのであった。

二首目の歌でも「霍公鳥」は現れていない。ここでは、「霍公鳥」を呼び寄せる花として「あふち」が歌われることに注目したい。「あふち」は万葉集中多くはみられない花であり、問題としている家持と書持の贈答以外は二首をみるにすぎない。歌を見ていきたい。

⑤ 我妹子にあふちの花は散り過ぎず今咲けるごとありこせぬかも　十一一九七三

⑥ 妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに　五一七九八

⑤の歌は夏の雑歌にあり、季節は橘と同じととらえてよいであろう。「あふち」の花が散らずに、今咲いているようにあってほしいという歌であるが、枕詞として「我妹子に」逢うということから「あふち」の「あふ」という音とかけて使われているのである。⑥の歌は憶良の「日本挽歌」の反歌である。この歌について、伊藤博氏が『『あふち』に「逢ふ」を懸け、「散りぬべし」に再び逢うことがかなわなぬことを匂わせていよう」[註7]とし、妻を失った悲しみを歌うこの歌では数少ない例の「あふち」は花そのものではなく相手に「逢う」という意味が強く意識されている。

鈴木武晴氏は、[註8] この二首を例として「妻に『逢ふ』意をこめている」ということからこの歌を大嬢の立場に立つとされる。松田聡氏は伊藤氏の説を肯定しつつも「逢う」のはやってくる「山霍公鳥」であるとし、「意表をついた面白さ」[註9]からこの花を歌ったとされる。少ない用例ではあるものどちらの歌でも相手と「逢う」ことを意識した表現であることを見る限り、問題としている歌を理解する上で季節の花とし「あふち」が選ばれたことは重要だといわねばならない。しかし、ここで考えなくてはいけないのは、一首目と同様に「あふち」も植えられていないということになる。書持は、もし植えたら霍公鳥が来るだろうかと仮定しているに過ぎず、書持の歌の景には霍公鳥も花もないのである。来てほしい霍公鳥への思いを強めながらそれを呼ぶための花がない、季節を感じ取れない平城の旧都の庭を歌っているというのがこの書持の二首といえよう。書持は旧都の季節の景を具体的に歌わないことで、家持に霍公鳥を意識させつつ、平城京に残されている庭へと意識をむけさせているのではないだろうか。

二

書持のこの二首に対して、久迩京から家持はどのように答えるのだろうか。家持は、まず漢文で「橙橘初めて咲き、霍鳥翻り嚶く。この時候に対ひて、詎志を暢べざらめや。因りて三首の　短歌を作り、以て鬱結の緒を散らさまくのみ」と述べることから始まる。家持は書持に答える歌の前に漢文において、橘はようやく咲き、霍公鳥は飛びながら鳴いていると記している。そして、そのような季節の景の中で短歌を作ることで「鬱結」を晴らすとしているのである。書持がまだ感じることのできない季節を家持は感じとり、その上で歌を作るということが記されていることを問題としてよいのではないだろうか。

旧都にいる書持から送られた歌はまだ初夏の景物がないことが歌われている。しかし、家持のいる久仁京では、歌うことへと心をむけさせるほどの季節の変化があったといってもよいだろう。内舎人家持は久迩京を次のように歌う。

⑦ 今造る久迩の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし

六―一〇三七

天平十五年（七四三）秋八月十六日の作である。問題としている贈答歌から二年後のものであるが、聖武天皇に仕える内舎人家持にとって「久迩京」は、まわりの山も川も「さやけき」故に新しい都に定められたというのである。すでに言われているとおり、山と川が完全な姿であることをほめるのは人麻呂以来の伝統である。ここではすがすがしいという讃美の言葉が久迩京を都として位置づけているといえよう。聖武が平城京を後にして久仁を皇都としてから三年がたっている。不安定な情勢の中でたとえ新都は十全ではなくとも内舎人としての家持はこのように歌うことが求められていたといえよう。旧都よりも整っていない都。しかも山に近い場所の久迩京であるにも関わらず都としての表現が求められるのであった。

ここで一首目をみてみよう。従来この歌は、書持の歌に総括的に答えたとするがそれだけであろうか。家持はその地を「山辺」と歌う。旧都より山が近いということは、本来都会的ではないことであるが、夏の風物である霍公鳥は、まず山からやってくる。そして「霍公鳥木の間立ち潜き鳴かぬ日はなし」と歌うようにすでにいつも声を聞くことができるという。それは、旧都よりも早く季節を感じ取れるということに他ならない。旧都の書持が感じていない季節を家持は確実に感じていると歌うのである。これは、久迩京を季節の歌によってほめていることになるといえよう。

さらに二首目では、「霍公鳥」が今来て声を響かせているが家持は、鳴いていることを前提にいつも鳴かずに「橘の玉貫く月」だけに鳴くのかと詰問している。書持の歌う「霍公鳥のいない景」を受けつつも、家持はここでは橘とともに季節を表すものとしての景であると答えるのである。伊藤氏は「常花としていつもきいていたいとする書持に同調している」とされるが、家持はむしろ旧都にないものを歌うといってよいのではないだろうか。「山辺」にいるからこそ季節の変化をいち早く感じ取れるというのである。

三首目の歌は、書持の歌に直接答えるといってもよいであろう。書持が歌う「あふち」は「玉に貫く」もの、つまり薬玉にして飾るという風習を通して歌われる。かつて旧都で家持とともに見たということを伝える表現でもあろう。家持はその「あふち」を理解しつつも「あふち」を薬玉ではなく、花そのものとして歌うところに意味があると思われる。家持の歌う「あふち」の花は盛りを過ぎ今、散ろうとしている。書持の歌う「玉」としての「あふち」は家持の歌では宝石のように美しく揺れながら散る景として歌ってみせたのである。伊藤氏

は「日本挽歌」では、「あふち」に逢うという意味をとらえつつ、それが「散る」ことと結びつけてとらえられているが、「あふち」が単に季節の花というのではなく、散るということに意味を持つ花としての理解があったいえってもよいだろう。そして、書持があえて季節の花として「あふち」を選んだことを考えると家持は、書持の歌から「日本挽歌」の影響を理解し、それに答えてみせる形であらたな景を作り出したのである。吉村誠氏はこの家持の歌を「書持の歌を自分の居る場所に引きつけて解釈」[註⑩]したものとされる。家持にとっての「山辺」は旧都の景以上であることの確認となろう。

家持と書持との贈答を考える上で二人のおかれている場所は大きな意味をもつことは言うまでもない。家持にとって自分の居る場所とは新たな都に他ならない。内舎人として山辺の久迩京にいる家持と旧都にいる書持という二人は共通の歌の文化圏にいたことは間違いないが、妻をはじめ、親しい人々を旧都に残している家持の立場をとらえ、その意味を明らかにさせた歌は、書持が、まだ季節をとらえられない景としての旧都を歌うことによって得られたものではなかったのだろうか。書持の季節へのあこがれは、家持によって「山辺」を季節をいち早くとらえる場所とし、内舎人として歌う「さやけし」とは違った観点から久迩京を賞める歌を作り得たといえよう。言いかえれば、二人の贈答によって新たな景を作り出したということになる。

三

こうした二人の歌の表現を考えるにあたり、同時期に久仁京から女性に贈られた相聞歌における景を見ていきたい。

⑧ 久迩京に在りて、寧楽の宅に留まりし坂上大嬢を思ひ、大伴宿祢家持の作りし歌一首

一重山隔れるものを月夜良み門に出で立ち妹か待つらむ

四―七六五

⑨ 藤原郎女の、これを聞きて即ち和せし歌一首

道遠み来じとは知れるものからに然そ待つらむ君が目を欲り

四―七六六

⑩ 大伴宿祢家持の更に大嬢に贈りし歌二首

都路を遠みか妹がこのころは祈ひて寝れど夢に見え来ぬ

今知らす久迩の都に妹に逢はず久しくなりぬ行きてはや見な

四―七六七・八

⑪ 大伴家持の、坂上大嬢に贈りし歌一首

春霞たなびく山の隔れれば妹に逢はずて月そ経にける

八―一四六四

⑫ 大伴宿祢家持の、久迩の京より、寧楽の宅に留まりし坂上大嬢に贈りし歌一首

あしひきの山辺に居りて秋風の日に異に吹けば妹をしぞ思ふ

八―一六三二

⑧の歌は書持の歌の左注と同様に題詞に「寧楽の宅」と記されている。このような記され方について鈴木氏は、大伴家の本宅としての「寧楽の宅」と記すことであることが重要だとされる。[註⑪] そして、大嬢と書持とともに本宅にいたであろうとのことから書持と大嬢とは「心かよいあう会話がなされていたであろう」とし、先の書持の歌が大嬢の気持ちになっているものとされるが、はたして、「寧楽の宅」を実体的

な場所を示すものとしてのみとらえてよいものであろうか。この歌で家持は二人を隔てるものは「一重山」であるというが、へだてているのは山一つのみである。同じ久迩京から高丘河内連[註48]は次のように歌う。

⑬ 故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひそ我がせし

六―一〇三八

旧都は山一つを超えるだけなのに遠くであるような思いをしているとして、心理的な距離の隔たりが久迩京との間にあると表現する。官人たちには山一つが実際の距離をこえたものとしてとらえられているのである。これは内舎人家持も同様であろう。家持が書持に贈った歌にある「山辺」は季節をいち早くとらえられる場所であったが、相聞においては、障害となるものにほかならない。⑨の作者の藤原郎女については、明らかではないが、[註49]家持同様久迩京に在住していた人物であろう。藤原郎女は久仁京から旧都は「道遠み」と歌い、距離の遠さ故に通えない家持を思いつつ、女性の立場で大嬢が待ちつづけていることを家持に歌いかけている。久迩京と旧都と隔てられた男女には景は恋の障害としてとらえられてしまうのである。それは⑩の二首でも同様であろう。一首目で家持は夢でも会えないことを相聞歌の多くの例のように相手の気持ちが自らにむいていないことではなく、「都路を遠みか」と距離によるものとしている。更に二首目では、それゆえに会えない時間が長くなっているというのである。このように相聞歌の世界では、旧都と久迩京は家持と大嬢を時間的にも空間的にも隔てるものであったといえよう。

⑪・⑫は春・秋の相聞として萬葉集中に収められているものである。⑪の歌の春の景としての「霞」は春を告げるもの、季節を感じ取るものではあるが、ここでは山にかかり、その山が二人を隔てていると歌う。季節を表すはずの「霞」は季節を感じる喜びとはつながらず障害となる山とのみ関係しているのである。⑫の歌における季節も同様であろう。家持は書持の歌に答えた時と同じように、自らのいる場所を「山辺」とするが、山辺は季節を感じとらせてくれはするものの、季節の思いは今、近くに居ない妹への思いへと向けられてしまう。相聞歌において、久迩京の景は景として季節をとらえるものではないことが確認されよう。さらに紀女郎との贈答歌の表現を考えていきたい。

⑭ 大伴宿祢家持の紀女郎に報贈せし歌一首

ひさかたの雨の降る日をただひとり山辺に居ればいぶせかりけり

四―七六九

⑮ 板葺の黒木の屋根は山近し明日の日取りて持ちて参来む

⑯ 黒木取り草も刈りつつ仕へめどいそしきわけと褒めむともあらず

四―七七九・八〇

⑭において家持は自らのいる場所をやはり「山辺」と歌うが、その場所はあなたがそこには居ずに自分「ひとり」でいるため、「いぶせかりけり」と訴えている。ここでは「山辺」は降りこめる雨とともに紀女郎との間を隔てる景としてのみ表され、「いぶせし」という思いを強める景となっているといえよう。⑮・⑯は五首贈っているうちの二首である。[註50]この歌において家持は、久迩京の景を「山近し」とするが、その山はあなたの家の「板葺きの黒木の屋根」を作る木がある実用的な山であるとすることが特徴であろう。都の女性の心をつかむためには、久迩京という「山辺」は都の文化と関わる実用性こそが効果的なのである。

見てきたように、書持との贈答と同時期に旧都の女性に贈った歌における景は異なっていることが明らかである。家持を含む旧都、平城京における女性の歌の文化圏では、共通の理解のもとで相聞歌がかわされていたということをすでに論じたことがあるが、[註⑯] 家持は久迩京においても、旧都の女性たちとの贈答においては、旧都から見た久迩京の景でしか歌わず旧都における女性の歌の文化圏の中にいるといってよいであろう。こうしたあり方は同時期でありつつも書持との贈答と大きく異なっていると言わなくてはいけない。

おわりに

内舎人として久迩京にいる家持に旧都から弟書持が歌を贈り、家持はそれに答える。初夏の景物を通して二人は二人がいる場所が異なっていることを意識し合うのであるが、果たしてそれは、実際の心のみを表現したものであっただろうか。歌の文化圏の中で共通に理解されている「霍公鳥」を二人は、違った場所から歌い、それぞれの場所を歌の表現世界で明らかに位置づけている。旧都はまだ季節が訪れず、久迩京ではすでに季節を感じるということは、久迩京にいる家持にとって、新たな久迩京への讃美という表現となるであろう。そして、そのきっかけを作ったのは、兄弟であり、同じ文化圏の中にいた弟書持であった。このように考える限り、書持は旧都にありながら、女性たちとは異なった歌の文化圏を家持に求めていたと言ってもよいだろう。それは、大伴家の男性という立場によるもので、内舎人として久仁京にいる家持に旧都を意識させつつ新たな歌世界へ向けさせるものであったといえよう。

註

① 鉄野昌弘氏は家持の漢文に注目し、「動乱の中で、ようやく官人として船出しようとする兄弟が、そうした滋養起用における情志を表出する方法を、先人の歌や詩に導かれつつ模索していた」とされる。「詠物歌の方法 ―家持と書持―」『萬葉』第百六十三号

② 「家持と書持の贈報」『山梨英和短期大学紀要』第二一号・「家持と書持との贈報再論 ―異論を超え真実へ―」『都留文科大学研究紀要』第八十五号

③ 『続日本紀』によれば、天平十二年十二月に久仁京に至り、翌年の正月は久仁京で朝賀。閏三月には五位以上に平城居住を禁じている。家持はこのときまだ五位にはなっていないが、内舎人という立場上それに準じたものである。

④ 三九〇九番歌の脚注。

⑤ 橘朝臣奈良麻呂の集宴を結べる歌十一首　巻八―一五八一～九一

書持の歌は次のものである。

あしひきの山のもみち今夜もか浮かび行くらむ山川の瀬に　一五八七

⑥ この宴での歌についてはすでに論じている「集約する心 ―家持の歌の場―」『別府大学紀要』第四十六号

⑦ 『萬葉集釈註』における「日本挽歌」の反歌七九八の釈文

⑧ 註②に同じ。

⑨ 「家持と書持の贈答 ―『橘の玉貫く月』をめぐって―」『萬葉』第二百二十二号

⑩ 「『独居平城孤宅作歌』の意味」『大伴家持と奈良朝和歌』

⑪ 註②に同じ。

⑫ 巻六の配列においてその前の家持の一〇三七の題詞が天平十五年の「久迩京」のものであり、高丘連河内がこの時に「造離宮司」という官職であることから、久迩京での作と考えられる。

⑬ 藤原郎女は万葉集中にこの一首を残すのみであり、伝未詳である。

⑭ 歌は次のような形で贈られている。

大伴宿祢家持の、更に紀女郎に贈りし歌五首

我妹子がやどのまがきを見に行かばけだし門より帰してむかも

うつたへにまがきの姿見まく欲り行かむと言へや君を見にこそ

板葺の黒木の屋根は山近し明日の日取りて持ちて参来む

黒木取り草も刈りつつ仕へめどいそしきわけと褒むともあらず

ぬばたまの昨夜は帰しつ今夜さへわれを帰すな道の長手を

⑮ 「歌に遊ぶ」『アジア歴史文化研究所報』第十七号

歌の本文は『新日本古典文学大系』（岩波書店）による